

# 平成5年度 発掘調査概報

—新屋古墳群発掘調査概要—



茨木市教育委員会



新屋古墳群航空写真

## はしがき

今日のわたし達の生活は、先人が培ってこられた長い歴史の上に成り立っています。

幸いにも“わたしたちのまち茨木”の地は、原始・古代から温和な気候と肥沃な土壌に恵まれたことにより、多くの人々がこの地を生活的舞台として選び、数々の有形・無形の文化遺産が残されています。

こうした文化や遺物からわたし達は、人間生活の変化を知るだけでなく、その進歩と発展を教えられるとともに、心のよりどころにもなっているのです。

しかし、近年まで、のどかな田園都市であった茨木市も、昭和45年に開催された「万国博覧会」を契機として都市化が進み、その開発に伴って、先人たちの貴重な文化遺産が心ならずも失われ、忘れ去られようとしております。

今に生きるわたし達は、先人が残してくれた貴重な文化遺産を、未来に生きる人たちに伝えていく責務がありますので、そのためには先ず、その保存や保護をしていくことが急務であると考えるのであります。

今回、ここに報告いたします『新屋古墳群発掘調査概報』も、そのひとつであり、調査の結果、多くの貴重な資料を得ることができました。また、開発者の深い御理解と関係の方々の御協力によりまして、石室の移築保存も可能となりましたことに、深く感謝の意を表しますとともに、本冊子が今後多くの方々に読まれ、文化財に対する認識や理解の高揚に役立っていけば、幸いであります。

平成6年3月31日

茨市教育委員会  
教育長 村山和一

## 例　　言

1. 本概報は、平成3年11月18日から平成4年5月21日までの期間、茨木市福井に所在する新屋古墳群の発掘調査結果をとりまとめたものである。
- 2 新屋古墳群は、過去の調査や踏査の結果、全壊・半壊したものと含め、約30基の円墳からなる6世紀後半頃（古墳時代後期）の群集墳である。
3. 調査の対象となった古墳は、事前の踏査の結果、当初は第26号墳と第17号墳の2基の予定であったが、その後のトレンチ調査による試掘の結果、第31号墳・第32号墳・第33号墳（仮番号－1号墳）・第25号墳の4基が増え、計6基の調査となった。
4. 本発掘調査は、茨木市教育委員会社会教育課主査奥井哲秀と同文化財調査員（嘱託員）中東正之が担当した。
5. 外業調査には、同文化財調査員（嘱託員）濱野俊一のほか、調査補助員として下記の方々の参加協力を得た。

藤田昌宏 小牧 真 林 和博 高瀬隆治

島田豊彰 藤田明弘 木全邦之 原口 武

内業整理作業は、西坂泰子を中心に、桑原紀子・大戸井和江・田中良子・森木芳子・峯松皓代・高橋公子諸氏の協力を得た。

6. 発掘調査の実施にあたっては、協栄生命保険株式会社、MA企画設計前田昭氏、株式会社タチバナ、新屋坐天照御魂神社、土井要氏ほか関係各位に御協力いただきましたことに感謝いたします。
7. 本概報の執筆及び写真撮影は、奥井哲秀が担当し、遺物実測及びトレースは、西坂泰子が担当した。
8. 本概報の標高はT・P（東京湾標準高）を使用している。

# 目 次

はしがき  
例 言

## 本文目次

I	調査に至るまでの経過	1
II	新屋古墳群の位置と環境	3
III	既往の調査	5
IV	今回の調査結果	9
	《第17号墳》	9
	《第25号墳》	11
	《第26号墳》	12
	《第31号墳》	14
	《第32号墳》	15
	《第33号墳》	16
V	まとめ	17

## 挿図目次

図-1	新屋古墳群位置図	2
図-2	第12号墳 発掘調査開始	4
図-3	第12号墳 石室	6
図-4	第12号墳 遺物出土状況	6
図-5	第21号墳 石室	6
図-6	第23号墳 石室	6
図-7	古墳位置図	7
図-8	第17号墳 発掘調査状況	10
図-9	第17号墳 墳丘測量図	10
図-10	第25号墳 石室床面遺物出土状況	11
図-11	第25号墳 墳丘測量図	11
図-12	第26号墳 玄室内部	12
図-13	第26号墳 墳丘測量図	13
図-14	第31号墳 位置測量図	14
図-15	第32号墳 石室（北から）	15
図-16	第32号墳 位置測量図	15
図-17	第33号墳 石室（南から）	16
図-18	第33号墳 玄室内遺物出土状況	16
図-19	現地説明会	19
図-20	現地説明会	19
図-21	第17号墳 石室実測図	21
図-22	第25号墳 石室実測図	23

図-23	第26号墳 石室実測図	25
図-24	第26号墳 玄室内石棺出土状況実測図	27
図-25	第31号墳 実測図	28
図-26	第32号墳 石室実測図	29
図-27	第33号墳 石室実測図	31

### 図 版 目 次

図版-1	第17号墳 石室(敷石有り)	33
	第17号墳 石室(敷石なし)	33
図版-2	第25号墳 石室	34
	第25号墳 石室内部	34
図版-3	第25号墳 床面敷石状況(奥から)	35
	第25号墳 床面敷石状況(入口から)	35
	第26・25号墳 調査前の状況	35
図版-4	第26号墳 石室(南から)	36
	第26号墳 玄室内石棺(南から)	36
	第26号墳 玄室内石棺(東から)	36
図版-5	第26号墳 奥壁側遺物出土状況	37
	第26号墳 鉄刀出土状況	37
図版-6	第26号墳 閉塞石(入口から)	38
	第31号墳 石列状況(南から)	38
	第31号墳 石列状況	38
図版-7	第32号墳 石室発見状況	39
	第32号墳 石室(南から)	39
図版-8	第33号墳 石室(南から)	40
	第33号墳 玄室敷石と遺物出土状況	40
	第33号墳 金環出土状況	40
図版-9	第17・25号墳 出土遺物	41
図版-10	第25・26号墳 出土遺物	42
図版-11	第26号墳 出土遺物	43
図版-12	第26・31・33号墳 出土遺物	44
図版-13	第33号墳 出土遺物	45
図版-14	第17・25号墳 出土遺物実測図	46
図版-15	第25・26号墳 出土遺物実測図	47
図版-16	第26・31号墳 出土遺物実測図	48
図版-17	第33号墳 出土遺物実測図	49
図版-18	第33・25号墳 出土遺物実測図	50

## I 調査に至るまでの経過

新屋古墳群は、茨木市大字福井に位置する約30基余りの円墳からなる古墳群である。

平成2年6月、この地に協栄生命株式会社によって年金ホーム（有料老人ホーム）の建設が計画されたが、文化財（古墳）が存在していることから、その対応についての相談が大阪府教育委員会文化財保護課へあった。

その後、約1か月の間に、府教委と茨木市教委、茨木市教委と協栄生命、府内調整会議など、開発をめぐる話し合いや、文化財の保存対策などに向けての打ち合せが行われた。

10月24日、府教委と茨木市教委は、会社側に建設計画の図面を示してほしいと要請した。その結果、最初の開発計画の図面が提出されたが、この計画では「古墳の保存への配慮がされていない」との見解を示した。

その後、この見解を取り入れた会社側は、開発計画とともに古墳の保存を考慮した図面と立面図を再度提出された。

それとは別に、府教委は、古墳の位置を示した古い図面が、現状にそぐわないとのことから茨木市教委に対して、分布調査をまず行うようにとの指示がだされた。

平成3年1月末、茨木市教委は本格的に、古墳群中の各古墳の位置を確認するため、現地踏査を行った。

それとともに会社側も、新たに現地測量を行い、それに各古墳の位置を書き込む作業にとりかかった。

その後、何回ともなく茨木市教委と会社側との折衝がもたれたあと、平成3年4月、新たに測量された図面に、各古墳の位置を入れた図面と建物平面図・立面図・断面図・ふかん図の図面が再々度提出された。

会社側の文化財に対する理解と協力のもと、約1年以上にも及ぶ協議の結果府・茨木市教委は、計画地内に含まれる古墳2基についての発掘調査を行うこととし、調査後の移築保存について検討していくことになった。

調査は、平成3年11月18日から開始されたが、当初から予定の第26号墳と第17号墳の2基の古墳のほか、調査中にトレーナー調査などの試掘によって、新たに発見された小石室をもつ古墳（第32号墳）、すでに全壊したと考えられていた古墳（第25号墳）、古墳かどうかわからなかった古墳（第33号墳＝仮番号1号墳）、全壊していたため古墳とは断定できない（第31号墳）など、4基の古墳が建設予定地内であることから、計6基の古墳の調査となつたので、本調査は、翌年の平成4年5月21日の完了まで、約半年の期間を要した。



1. 新屋古墳群    2. 紫金山古墳    3. 南塚古墳    4. 青松塚古墳  
 5. 海北塚古墳    6. 将軍山古墳    7. 将軍塚古墳    8. 将軍山5号墳  
 9. 真龍寺1号墳    10. 耳原古墳    11. 鼻摺古墳(耳原方形墳)  
 12. 安威古墳群(西から 0号・1号・2号墳)

図-1 新屋古墳群位置図

## II 新屋古墳群の位置と環境

新屋古墳群は、茨木市大字福井に鎮座する「新屋坐天照御魂神社」の宮山一帯に存在する約30基余りの円墳からなる群集墳である。

その新屋古墳群の位置する茨木市は、北に古生層で形成された標高300m前後の丹波山地があり、西に大阪層群で形成された標高50m前後の千里丘陵が南北に延び、東と南は高槻市と摂津市の平野部とともに沖積層からなる三島平野が広がっている。

市内を流れる河川は、北の山地部に源を発し、南の平野部へと流れる安威川・佐保川・茨木川（昭和14年 田中町辺りで安威川と合流されたため、現在は廃川となり、その跡地は緑地と、道路となっている）そして西に隣接する箕面市に源を発し、中河原辺りで茨木川と合流する勝尾寺川などが主な河川で、いずれも屈曲しながら南へと流れ、神崎川と合流し大阪湾へとそいでいる。

こうした肥沃な土地と河川、そして温暖な気候に恵まれ、人々の活動は古くから、この地にみられるのである。

茨木市で、人々が活動した足跡の最も古いものは、今から約1万年も前の、旧石器時代の終わり頃で、この頃に使われた石の道具（ナイフ形石器）が、太田・安威・郡などの地域から発見されていることから、小数ながらも人々の活動のあったことがわかっている。

続く縄文時代も人々の活動の跡はあまり見られないが、東奈良遺跡では、前期の土器片と中期の石棒がわずかであるが発見されており、人々の活動が続いていたことがうかがわれる。その後、昭和54年に耳原の地で行われた発掘調査で、この時代の終わり頃の集落跡が発見されたが、現在のところ、茨木では、この「耳原遺跡」が最も古い集落であるが、同時期に水田に利用したと考えられる井堰が発見された「牟礼遺跡」もある。

次の弥生時代になると、日本に農耕のほか金属器が伝わり、全国的に遺跡が増えてくるが、こうした状況は、茨木市域においても同様である。

遺跡名だけをあげても、先述の耳原・東奈良のほか、日垣・郡・太田・中河原・溝咲・倍賀・春日・上穂積・駅前・中条・上中条・新庄・石堂丘遺跡など多くのものが存在している。

中でも東奈良遺跡は、弥生時代の初めから中世にいたるまでの、人々の足跡をみることができる大遺跡で、この地域の拠点的集落である。

とくに、昭和48年から翌年にかけて発見された、「銅鐸の鋳型」は、現在、国の重要文化財として認定されており、当時は大変な貴重品であった金属を扱

うことのできるムラとして、全国的にも著名な遺跡である。

古墳時代になると、市域の北半分を占める山地部の山麓沿いと、西側を南北に延びる千里丘陵裾部に、多くの古墳が築かれる。

古墳時代前期の古墳である「紫金山古墳」や「将軍山古墳」などは、長さが100m以上もある前方後円墳で、茨木川を挟んで相対するように築かれている。

また、中期には、長さが200m以上もある前方後円墳の「太田茶臼山古墳（第26代継体天皇陵）」、またすぐ近くには「太田石山古墳」が築かれている。

後期になると、南塚・青松塚・海北塚・耳原・將軍塚の各古墳のほか、安威古墳群・郡古墳群、そして今回調査をした「新屋古墳群」などの古墳群が存在している。さらに終末期のものとして、上寺山古墳（火葬墓）・初田1号墳・阿武山古墳などがあり、これらの古墳が、高槻市に存在する古墳などとともに、『三島古墳群』を形成しているのである。



図-2 第12号墳発掘調査開始(S.37年)

### III 既往の調査

昭和19年頃、新屋古墳群の東側を南北に走る道路の改修工事の際、古墳群の所在する山の土を探ったところ、須恵器などの遺物が出土したと伝えられている。

その後、昭和37年、協栄生命株式会社が社宅建設のため、整地作業を行ったところ、古墳の石室の一部が見られたため、府教委・茨木市教委・地元・協栄生命㈱との協議の結果、緊急の調査が行われることになった。

調査は、茨木市教育委員会が主体になって行ったが、開発業者への事情説明や発掘調査までの手続き、さらに調査人員、調査経費、調査期間、古墳群の現状の問題や文化財の保存問題などを含め、実際の調査に入るまでの関係者の努力は、相当なものであったことが、当時の記録から伺える。

実際の調査にあたっては、個々の考古学専門の学者や京都大学・同志社大学・立命館大学の考古学研究の学生が、各々自分たちの日程を調整して、調査に参加され、また地元の人達も、調査員の宿泊先やお風呂の提供などの協力のもとに調査が行われた。

同年10月、福井地区に「福井地区文化財顕彰保存会」が設置され、本格的な調査が開始された。

調査対象としては、第12号墳・第21号墳・第23号墳の3基であった。

当時の記録から、この古墳の規模と出土遺物などの概要を次に記すことにする。

#### ＜第12号墳＞

規模は、直径約15mの円墳で、現存する石室の長さ約4m、幅約2mの両袖式の横穴式石室を持った古墳である。

古墳の入り口付近には閉塞石があり、石室内部の底部には敷石が敷きつめられていた。

出土遺物は、玄室から高杯・杯などの須恵器片のほか土師器片、鉄釘・銅指環・切小玉、そして弥生時代の石鎌が1点出土している。

#### ＜第21号墳＞

規模は、玄室の長さ約3.5m、幅約1.2mで、比較的小規模の古墳である。羨道部は不明であるが、おそらく壊されてしまったためであろうと解釈されている。

石室内部の底部には、敷石が敷きつめられていた。

出土遺物は、奥壁近くから提瓶・杯蓋・台付細頸壺・穂などの須恵器のほか土師器の高杯や鉄鎌・鉄片などが出土し、さらに側壁沿いに鉄刀片が出土している。また人骨片が検出されている。

<第23号墳>

規模は、石室の長さ約3.7m、幅約1.3mの両袖式の横穴式石室を持つ古墳である。

墳丘などの規模は、古墳が整地された道路下となったため、墳丘及び天井石が壊された状態であり、正確な規模は不明である。また奥壁も抜かれた状態であった。

しかし、側壁下段は残っており、そのプランから両袖式であることかがわかる。

出土遺物は、敷石上部の奥壁近くに、土師器の壺や須恵器片が点在し、鉄鎌、羨道部から銅環・鉄釘のほか甕や高杯の須恵器片が出土している。



図-3 第12号墳 石室



図-4 第12号墳 遺物出土状況



図-5 第21号墳 石室



図-6 第23号墳 石室

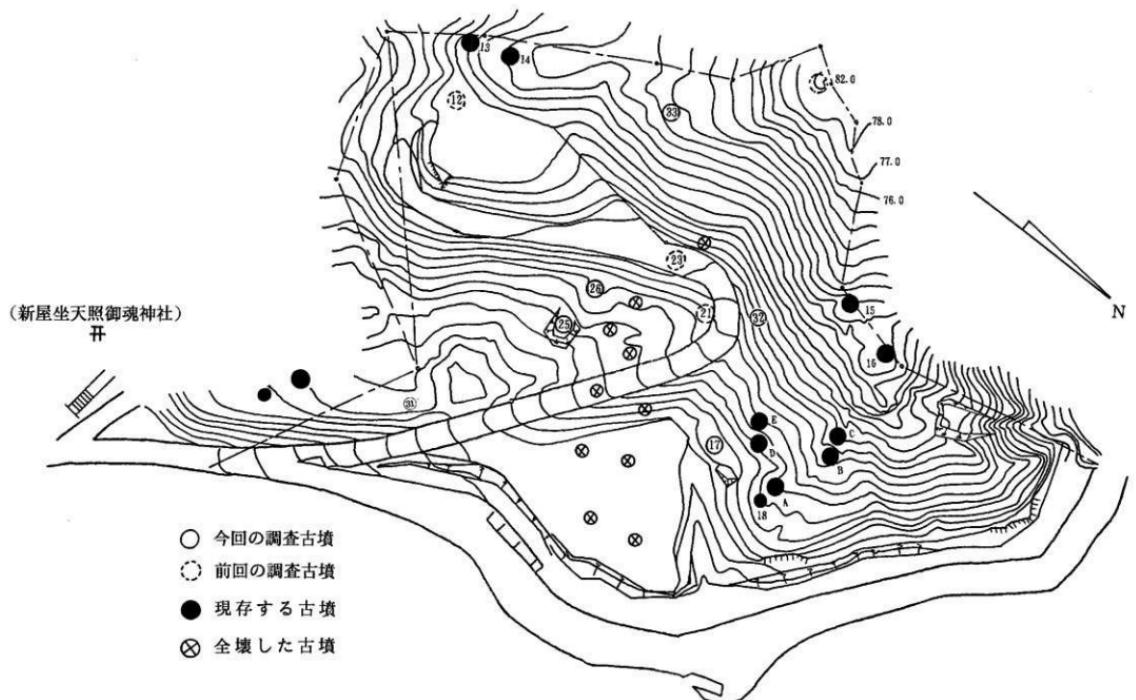


図-7 古 墓 位 置 図

## IV 今回の調査結果

新屋古墳群の位置する茨木市福井付近は、大阪層群で形成された堆積盆地の一部分に位置する。

古墳群は、旧佐保川（茨木川）右岸の、標高約82mの丘陵上の、東側斜面に約30基がこれまでに確認されている。

古墳群の南西方向の谷を挟んだ丘陵上には、昭和22年に京都大学の梅原末治氏によって発掘調査された「紫金山古墳」が存在している。この古墳は、東向きに築造された最も古い形式の前方後円墳で、全長約102m、後円部径約76m、前方部の幅約40mの、古墳時代前期の前方後円墳である。

この古墳の後円部の堅穴式石室内からは、鉄刀・鉄鎌・鎌・斧などの鉄製品のほか、車輪石・鐵形石、様々な玉類など多種多様な遺物が出土している。とくに注目を集めたのが、12面の鏡の出土であり、うち3面が中国製のものであったことである。

また、今回調査した当古墳群から旧佐保川をはさんだ東方の丘陵に、熊ヶ谷古墳群があり、さらに昭和37年には、熊ヶ谷古墳群近くの大坂層群中から化石ゾウの臼歯破片が発見されている。

### 《第17号墳》

建設敷地内にある古墳のなかで、当初から最も形態を残している古墳と目されていた古墳で、北東から延びる尾根と尾根にはさまれた標高約54.5mの浅い谷状に位置する。

墳丘は調査時点においては、径約10m・高さが1～2mで、雑木がおい茂っているものの、その高さからして石室の天井石はすでに欠落しているものと考えられた。

調査は、まず雑木の伐採とともに墳丘の平滑作業を行い、わずかに表土地面から見られた石（後に奥壁と判明する）を起点にして、石室の方向を見極めることにした。

その結果、石室は南に入り口を設け、主軸をほぼ南北方向に向けた、長さ5.0m、幅1.1mの規模を持つものであることがわかった。高さは、天井石が欠落していたため、最残存高約1.1mである。

右側壁の奥壁から6個目の石が、若干内側に入り込んでいるが、これは東から西への地圧の関係でずれ込んだもので、袖とは考えられない。結果、無袖の石室であるといえる。

古墳は、砂礫を含んだ黄褐色土層の地山を若干削り、その上層に黄褐色砂質土層や同色の小砂礫を含んだ土層、さらに黄褐色砂土層で盛土をしている。

玄室内部の底面には、拳大の石で床が敷きつめられ、入り口付近には、人頭大の石が数個見られたことから、おそらく埋葬後、入り口を閉じた閉塞石の残石と考えられる。

また、玄室の敷石の上面に炭が見られることから、後世に再利用されたものと考えられる。

出土遺物は、墳丘の平滑中に須恵器の壺片、土師器片などが少量みられるが、いずれも元の位置はとどめていない状況であった。

石室内部からは、内部に落ち込んだ埋土中から、須恵器の台付壺の脚部片、土師器片が出土している。また石室入口外から須恵器片が3点出土しているが、いずれも元の位置をとどめていない。

この古墳は、遺物量の少なさや閉塞石の残存状況から、内外部とも後世にかなり荒らされたものと考えられる。



図-8 第17号墳 発掘調査状況

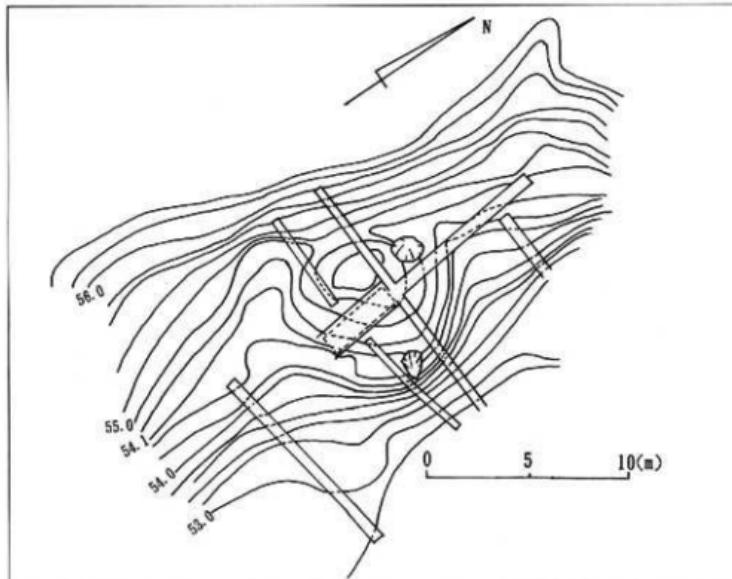


図-9 第17号墳 墳丘測量図

### 《第25号墳》

墳丘は削平され平坦地となっていたため、すでに全壊しているとおもわれていたが、雑木の伐採後に確認のため平滑し、トレンチ掘りを行ったところ、南向きの横穴式石室の一部が残存していることがわかった古墳である。

古墳は、第26号墳の東側に築造され、墳丘の裾部が26号墳と重なり合うように相接する古墳で、標高は約55.5mに位置する。

内部主体は、南向きで、片袖の横穴式石室である。石室の残存長は約5m、幅約1.1mで、比較的小さい石が玄室で2段、羨道部で最下段が残っていた。

玄室の床面には、敷石が施されていた。その上に元の位置をとどめていないが、人頭大の石が数個検出されている。棺台の可能性をも考えられるものである。

出土遺物は、玄門の両側壁近くで金環が、羨道部から、鉄片（時期不詳）・土師器片が出でているが、盗掘のためか遺物量は少ない。



図-10 石室床面遺物出土状況

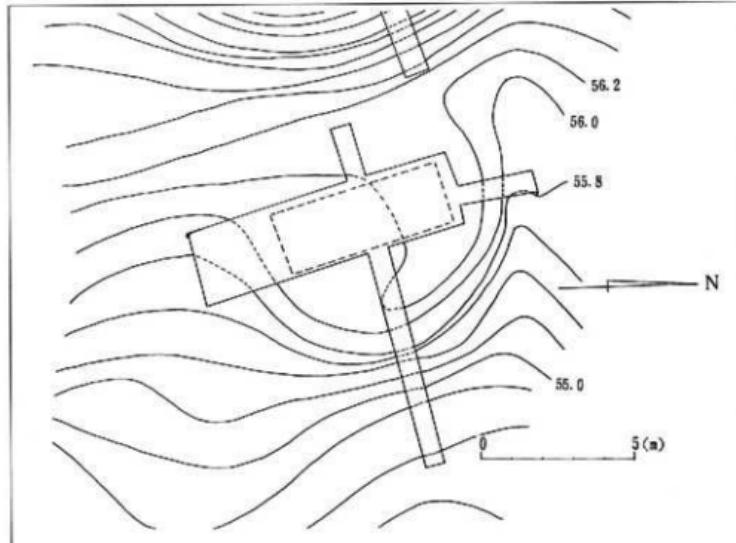


図-11 第25号墳 墳丘測量図

### 《第26号墳》

古墳群の中央からやや東斜面の、標高約57.5mに位置する古墳で、雑木の伐採後、墳丘の残存状態が良くわかる古墳である。

墳丘の規模は、直径約16m、高さ約2.0mの円墳で、緩斜面に築造されているため、西側の墳丘基底部から東側の墳丘基底部がかなり低くなっている。

内部主体は、南向きで左片袖の横穴式石室である。

天井石はすでに無く、奥壁は大きな割石の一枚石で、その石を支えるため、裏込め石として、奥壁の下部外側にもかなり大きな石が使用されていた。

両側壁は、玄室側で2段（一部3段）、羨道側で1段の石積みが残存していた。

玄室長約3.4m、残存高約1.6m、羨道長約3.1m、残存高1.3mで、今回の調査では、最も大きな古墳である。

羨道入口には、閉塞石が比較的良く残存しており、玄室からは敷石の上に、凝灰質砂岩製の石棺の底板部分が検出された。

敷石は、玄室奥から袖の辺りで5個、人頭大の石が、羨道との境を示すように並べられていた。これは玄室側に限られ、羨道には敷石が施されていない。

玄室に安置された石棺は、長さ0.45m、幅0.88mの長方形の切石を5枚つなぎ合わせて底板とし、全体の長さは2.25m、幅0.88mの規模をもつ組合せ式のもので、内部に朱が施されていた。天井と側板・小口は盗掘のためか、ばらばらに壊されていた。石棺の内部からは、ガラス製の小玉が出土した。

また、石棺内に納められていたと考えられる長さ約80cmの鉄刀が、1口発見された。これは盗掘の際、ばらばらに壊された石棺片の下敷きとなり、持ち去られなかったものと考えられる。その他の遺物は盗掘のためか、なにも見られなかった。しかし、石棺の外周（奥壁及び両側壁との隙間）に置かれていた、須恵器の高杯・壺・提瓶・杯などは完全に残され、さらに奥壁と両側壁のコーナーには、土師器の壺が、敷石下部から出土している。また、石棺の羨道寄りの右側壁との間に、馬具（杏葉・



図-12 第26号墳 玄室内部

辻金具)が出土し、石棺の底板を取り外すと、敷石の間から鉄刀が出土した。こうした玄室内の石棺の存在、馬具や鉄製品の出土、豊富な土器の出土量から、古墳群の中における長(おさ)的存在の人物が埋葬された古墳と考えられる。

さらに、羨道の閉塞石の間からは、須恵器片のほか土師皿・瓦器椀なども出土した。特に完形の白磁碗が閉塞石の上に、伏せられた状態で出土したことは、中世(12~13C)の頃に、この古墳の再利用のためか、古墳に対して何らかの祭り事をした可能性を考えられる。

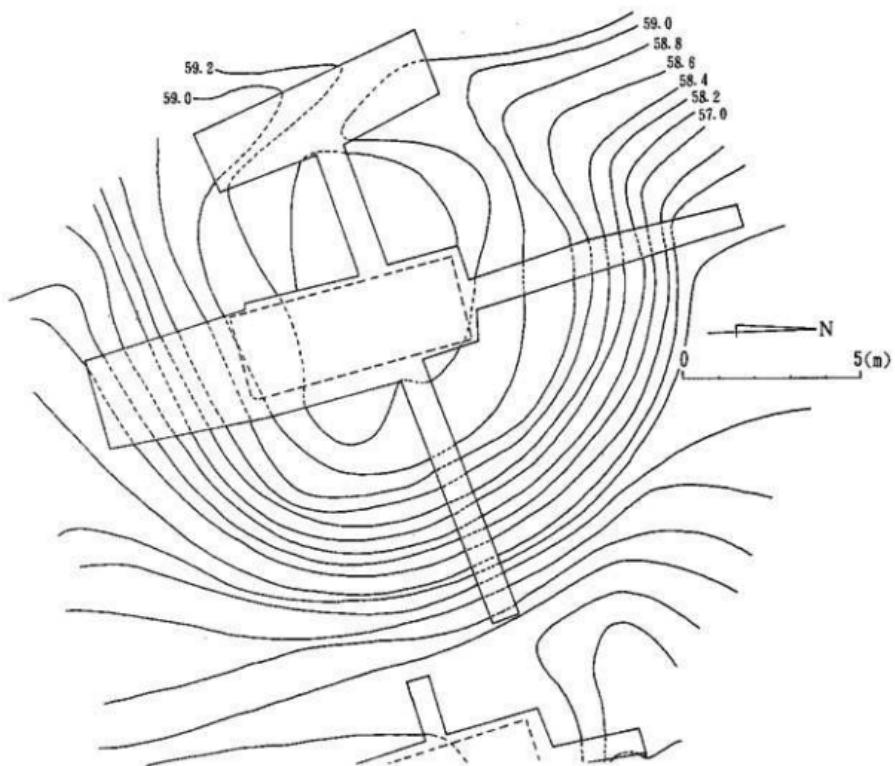


図-13 第26号墳 墳丘測量図

### 《第31号墳》

建設予定地内の南端で、西から南東に延びる緩やかな尾根の先端部分の雑木を伐採し、腐食土の除去後のトレンチ調査において、5個の人頭大の石が並んでいるのが検出された。石室の一部と考えられるもので、当初の予定になかったものである。

この石列は、標高約52mの地山上に並べられているが、石室の最下段の一部としては石の大きさが20~30cmと小さく、また周囲にも石室らしい石も見当たらないことから、古墳と断定するには早計かも知れない。しかし、石が並んでいること、周囲に土師器の壺片が出土していること、削平されているとはいえ、尾根の先端近くであることなどから、終末期（7C前半～中半）段階の小石室であった可能性がある。

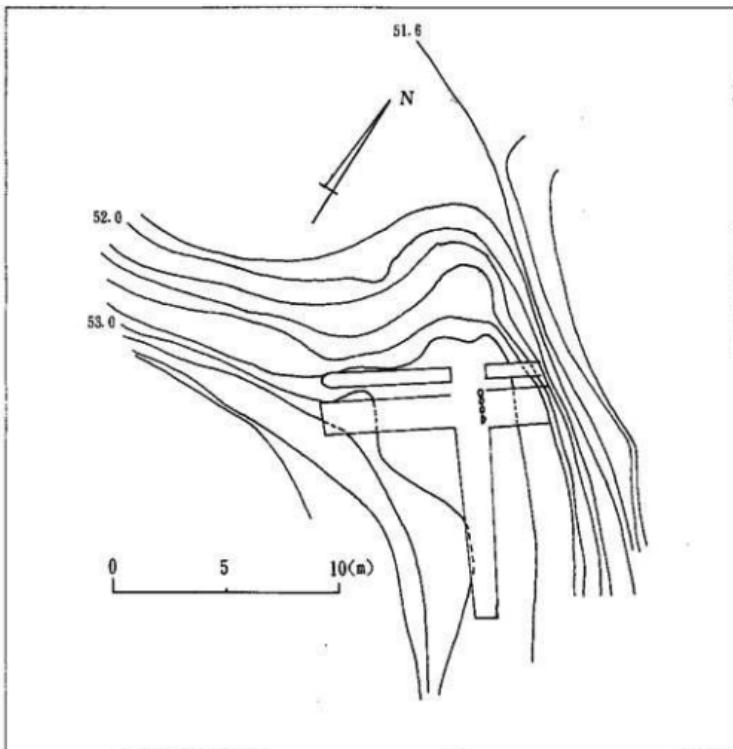


図-14 第31号墳 位置測量図

### 《第32号墳》

第17号墳の北側にあり、西から東へ延びる尾根の南側斜面の標高約58.5mに位置する小さな古墳である。

南側斜面の平滑作業中に新たに発見されたものであり、墳丘は、すでに削平されていた。

石室長約1.8m、幅約0.4mの南向きの小石室をもつ古墳である。石積みは、人頭大のやや扁平な石で両側壁が築かれ、奥壁は2段に積まれており、小さいといえどもしっかりと築造されていた。

出土遺物は、皆無であるが、その形態からして古墳時代終末期（7C頃）のものと考えられる。



図-15 第32号墳 石室（北から）

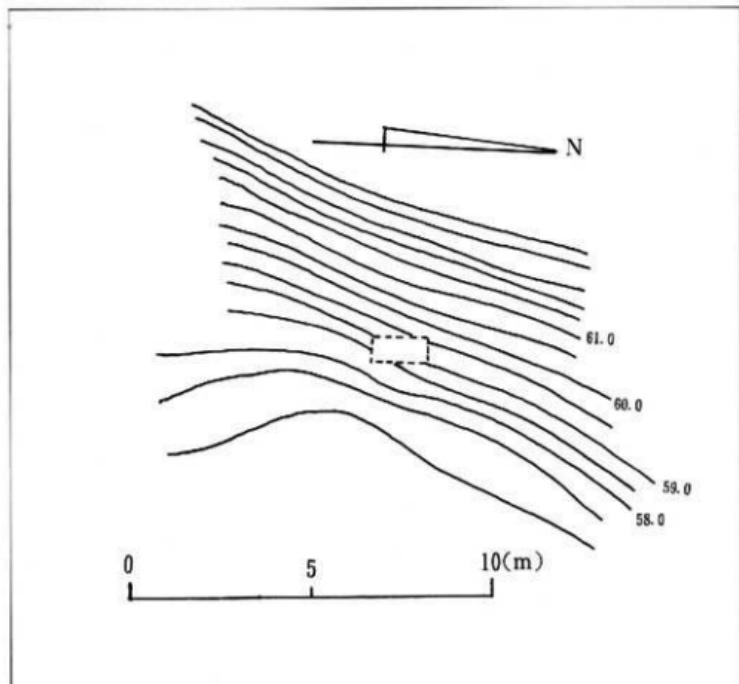


図-16 第32号墳 位置測量図

### 《第33号墳》

今回の調査古墳の中では、標高約69.0mの最も高所にある古墳で、西から東南に延びる尾根の中腹に位置する、南向きの横穴式石室をもつものである。

以前の分布地図の中に破線で円は書き込まれていたが、墳丘が削平されていたため、古墳であるのかないのかはっきりしないものであった。

とりあえず、確認のため、トレントチを入れてみたところ、第25号墳と同様に石室の一部の石が発見されたため、調査を行った。

石室は、西から東への地圧の関係で右側壁が内部に崩れ落ち、左側壁は逆に東側の低地へと転げ落ちた状態であった。羨道入口付近には、人頭大の石が数個検出されたことから、閉塞されていたものと考えられる。

石室の現存長は、6.5m、玄室の右側壁の最大残存高1.4mで、羨道は最下段のみが残されていた。

内部に落ちた側壁を取り除くと、玄室の床面に敷石が施されており、その上面の奥壁付近から、須恵器の高杯・提瓶・平瓶・杯蓋・杯身・聴などの完形品のほか、両側壁に接して須恵器の杯・提瓶、また鉄製品（釘・やりがんな）がみられ、さらに玄門近くでは金環が1個出土している。その後、敷石の取り外し作業中にも金環が出土していることから、追葬が行われた可能性が考えられる。



図-17 第33号墳 石室（南から）



図-18 玄室内遺物出土状況

## V ま と め

新屋古墳群は、昭和37年に調査された第12号墳・第21号墳・第23号墳の3基と、今回の第17号墳・第25号墳・第26号墳・第31号墳・第32号墳・第33号墳の6基の計9基の古墳の調査が行われたことになった。

古墳群は、約30基の古墳からなると考えられていたが、今回の調査における新発見などもあったことから、まだ、未確認の古墳があることも考えられる。

また、これまで、東斜面についての古墳群についてのみ注目されてきたが、宮山の南斜面にも散乱した石が見られることから、別の集団の古墳が存在する可能性もある。

今回の調査対象となった古墳の位置する新屋神社の宮山一帯の東斜面は、基本となる尾根の起伏は残されているものの、部分的には尾根が造成のため削平され、逆に谷状のところは埋められていたりしており、今回の調査時点ではもとの地形から、かなり変形したものであった。

そのため第26号墳などは、当初西側からの傾斜が、少しの平地（段状）のあと、墳丘の東の斜面に続いていたので、雑木の伐採後に確認できたほどであった。また第25号墳などは、全く平地化されていたため、確認のためのトレンチ調査でしか確認できなかった。

このようなことから、尾根の原形を古墳の位置関係から想定したうえで、古墳群の中での各古墳の位置関係をみてみることとする。（図-7参照）

標高約82.2mの山の頂上から派生する尾根が、東（A支脈）あるいは南南東（B支脈）へと延びている。A支脈の一群には、第15号墳・第16号墳・第C号墳・第B号墳・第A号墳・第E号墳・第D号墳・第17号墳・第32号墳（以上A群とする）の古墳があり、なかでも第E号墳・第D号墳・第17号墳の3基は、A支脈の南斜面に位置し、第15号墳・第16号墳は、中ほどの尾根上の比較的高所に位置している。

B支脈の一群には、第33号墳・第14号墳・第13号墳・第12号墳（以上B群とする）があり、この両尾根に挟まれた浅い扇状の谷には、第20号墳・第26号墳・第25号墳・第24号墳（以上C群とする）などの、一群がある。

A群は、大きく第15・16・C・B・A号墳（A-1群）と、第E・D・17号墳（A-2群）の二群に分けられ、さらにA-1群は、第15・16号墳（A-1-a）、第C・B・A号墳（A-1-b）の小二群に分けることができる。

B群は、最大規模の第12号墳を中心に、第33・14・13号墳でまとまり、C群は、第26号墳を中心に第20・23・25・24号墳でまとまる。

以上のように大きくは、三支群に分けられるようである。

個々の古墳を観察すると、第26号墳は、第12号墳とともに、その規模において古墳群中最大のものである。とくに第26号墳は、墳丘の規模が約16mと古墳群中最大のもので、石室に使用されている石も他の古墳より大きく、さらに石室内部には立派な石棺をもち、副葬品も鉄刀のほかガラス小玉、馬具類、そして豊富な土器類をもった古墳で、古墳群中の被葬者のなかでもリーダー的存在の人物と考えられる。

また、この古墳は、羨道入口の閉塞された石の上に、中世の白磁碗がうつぶせに置かれた状態で発見されていることから、中世にもこの古墳に対して、何らかの祭祀事が行われていた可能性が考えられるものである。

また第33号墳は、尾根上から少し下がった中腹に立地しているため、早くから墳丘や石室上部が自然流失したためか、その存在が認識されずに石室内部が埋まった結果、他の古墳に比べ遺物の残りが良好であった。

出土遺物は、各項で記述したとおりであるが、鉄釘や金環などの出土やその位置などから、二体分の木棺埋葬が考えられるものである。

他の古墳の埋葬形態も、おそらく木棺であると考えられることから、第26号墳は、異質の存在であるとも考えられる。

また、第25号墳は、第26号墳と墳丘が相接するように築造されていることから、両古墳の被葬者の親密な関係がうかがえるものである。

各古墳の築造時期は時間的な差こそあれ、ほぼ古墳時代後期（6C後半頃）で一定しており、わずかに古墳時代終末期（7C前～中半）にみられる、第32号墳のような小古墳が存在している。

また古墳の、入口の向きは地形にとらわれず、いずれも南向きに築造されている。

ここで第26号墳の築造過程を順をおって記述すると。

まず、

- ① 被葬者の立場などを考慮した古墳築造場所を選定する。
- ② 奥壁の位置を決め、地山を若干掘る。
- ③ 奥壁を置くときに、石室の方向と幅を考えて置く。
- ④ 地山を若干掘りながら奥から両側壁を並べるが、山の傾斜が西から東へと下降しているため、斜面の下側の東側壁を並べ、西側壁と順々に並べる。つまり上から下へ石を転がすほうが合理的である。このとき、石室内の地山は整地程度。
- ⑤ 両側壁の石を積み重ねるが、石が落ちないように外側に土を盛る。
- ⑥ 天井石をのせる。

- ⑦ 奥及び東北角に、土師器を埋める。（これはもっと早い段階かも知れない。）
- ⑧ 玄室に、石棺を安置する位置との界に人頭大の石を並べる。
- ⑨ 界に並べた石の高さまで土を盛る。つまり、棺台のようにする。
- ⑩ 石棺を安置する。
- ⑪ 石棺の周囲に敷石を敷き、副葬品を置く。
- ⑫ 被葬者を埋葬し、棺内にも副葬品を入れる。
- ⑬ 埋葬が終った後、羨道入口を閉じるための閉塞石を置く。
- ⑭ 最後のお別れをする。

以上のような推察ができるが、いずれにしても、この第26号墳は、新屋古墳群における中心的存在の人物が、埋葬されたと考えられるものであろう。



図-19 現地説明会



図-20 現地説明会



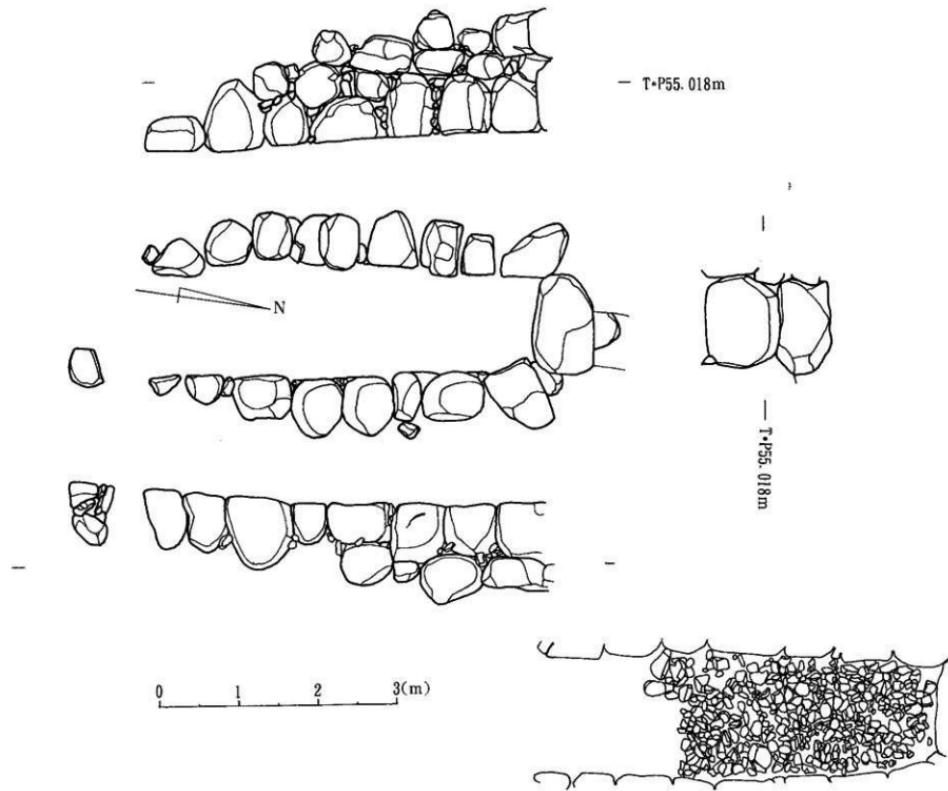


図-21 第17号墳 石室実測図

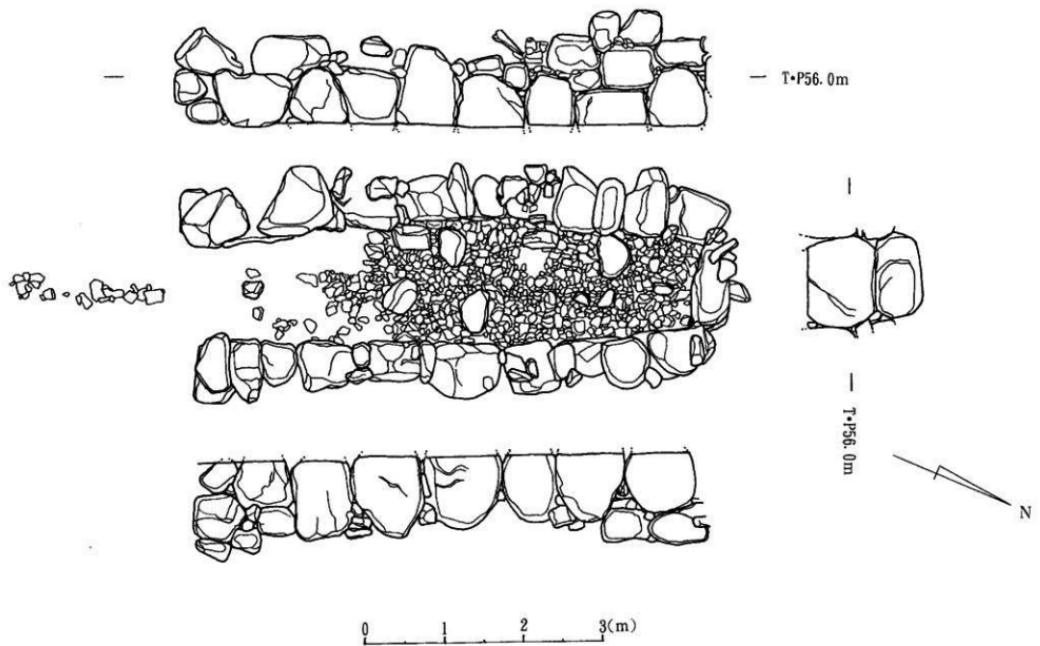


図-22 第25号墳 石室実測図

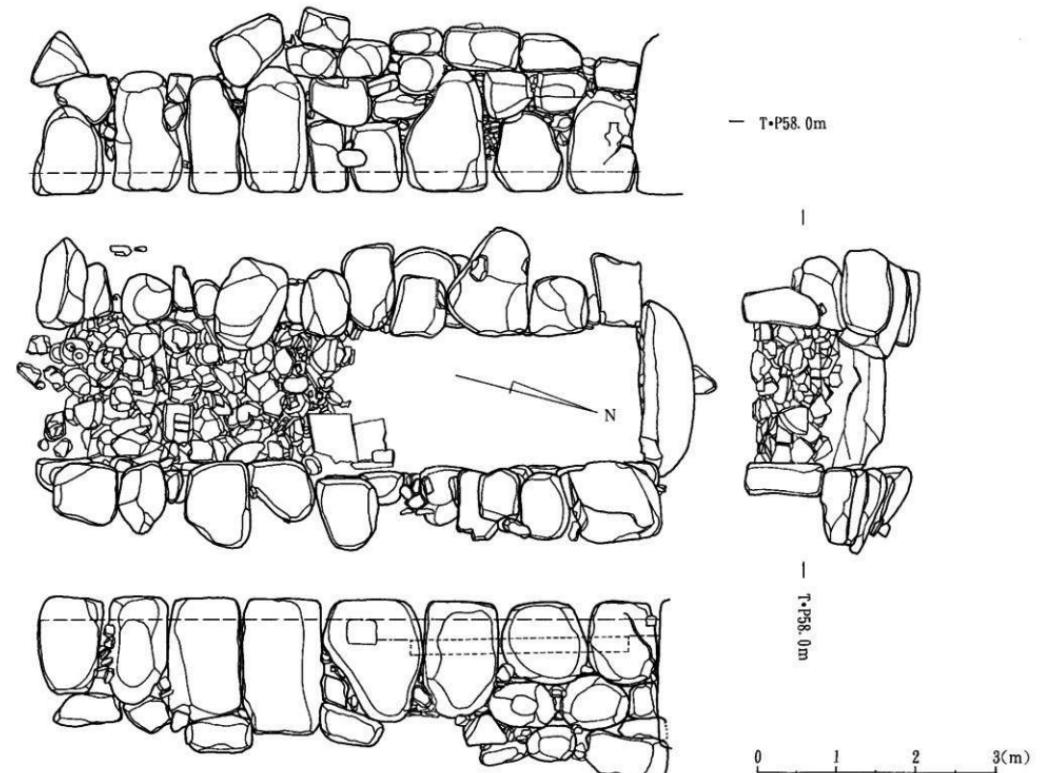


図-23 第26号墳 石室実測図

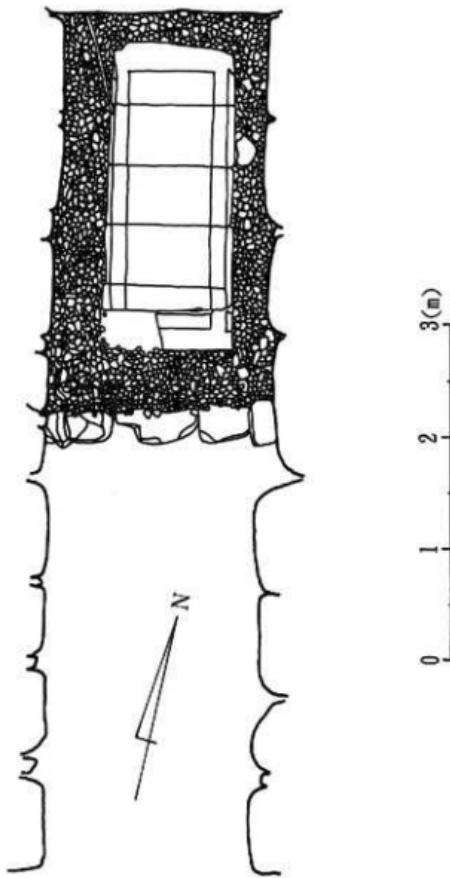


図-24 第26号墳 石棺出土状況実測図

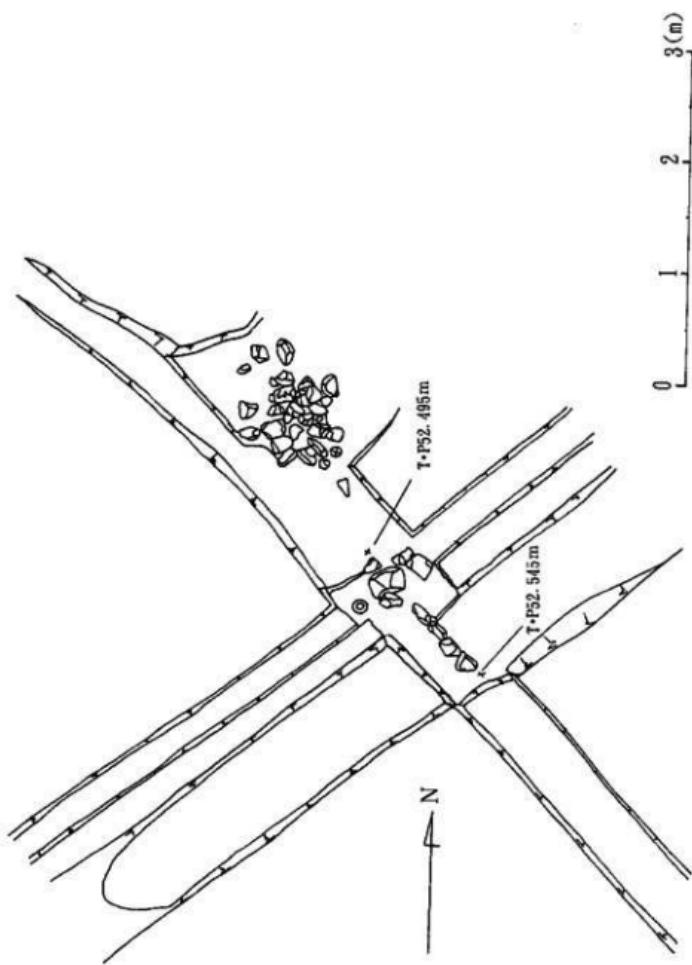


图-25 第31号墳 実測図

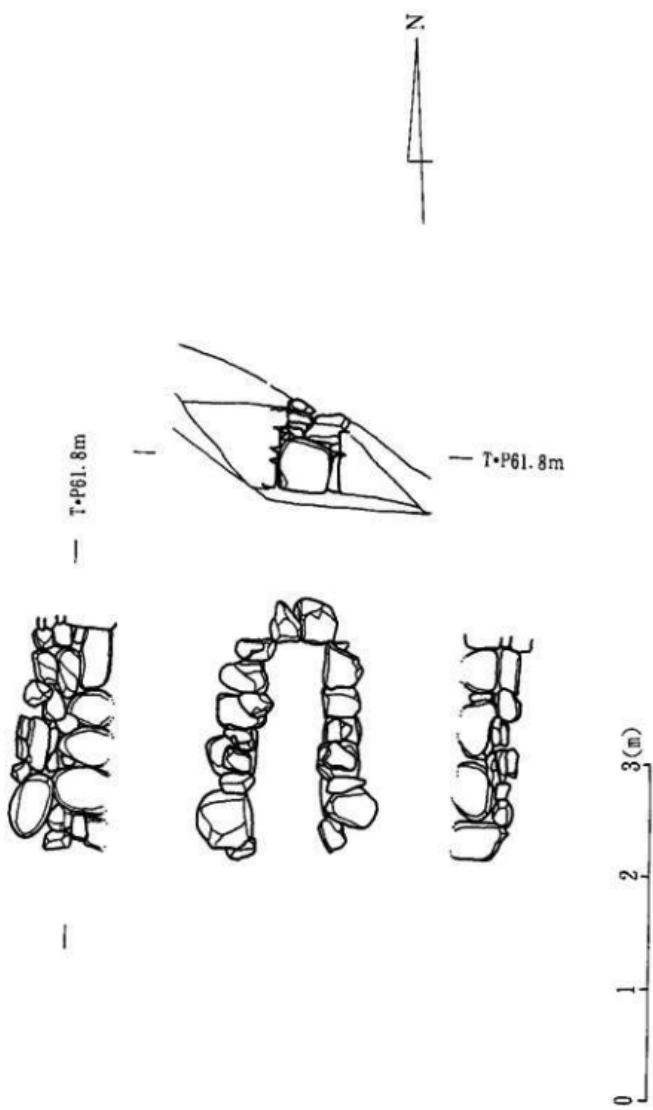


図-26 第32号墳 石室実測図



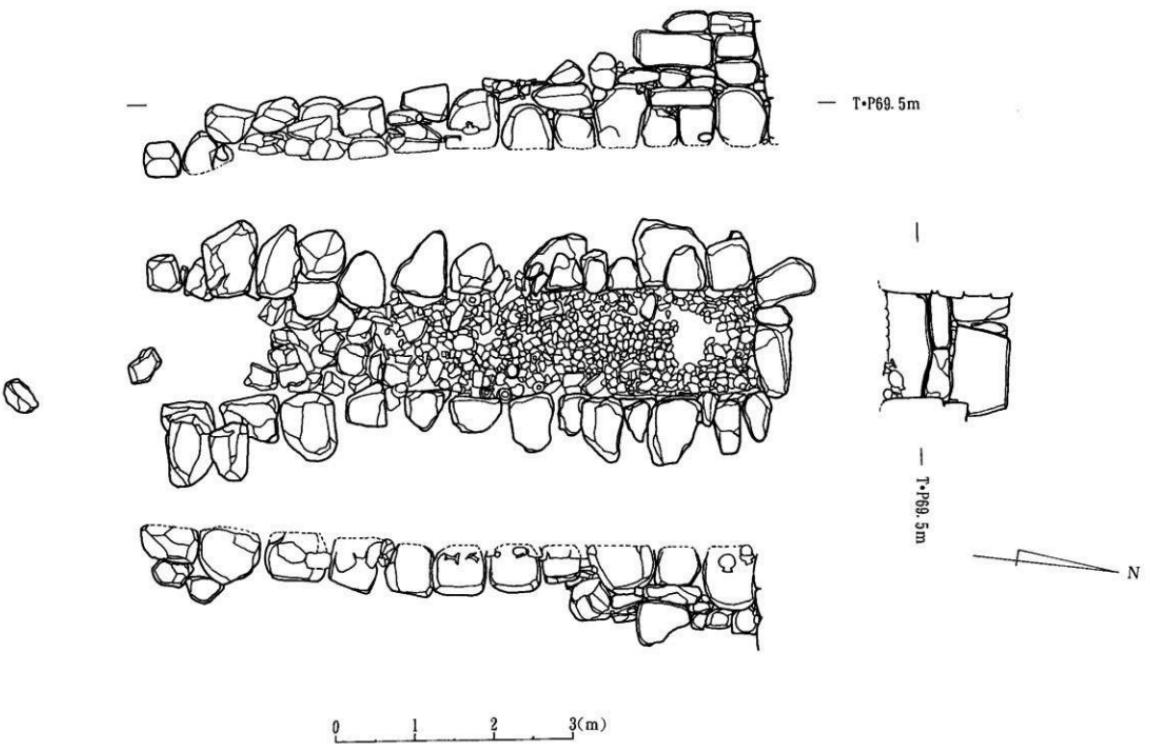


図-27 第33号墳 石室実測図

# 図 版

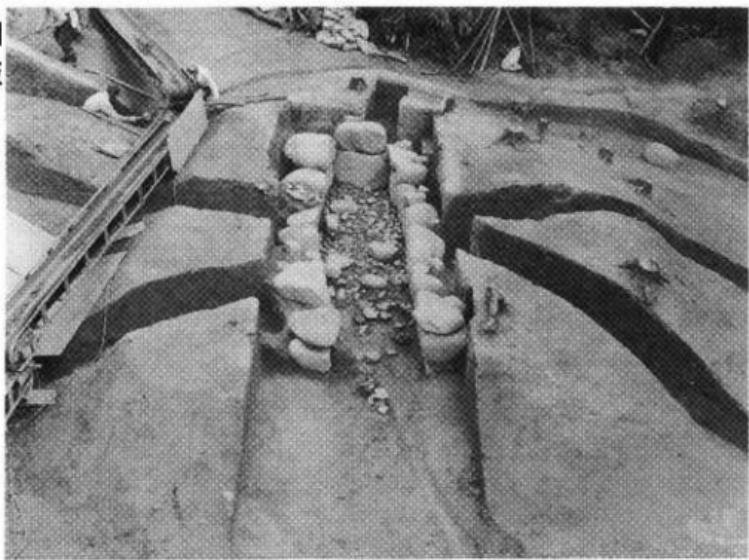




第17号墳 石室（敷石有り）



第17号墳 石室（敷石なし）



第25号墳 石室



第25号墳 石室内部



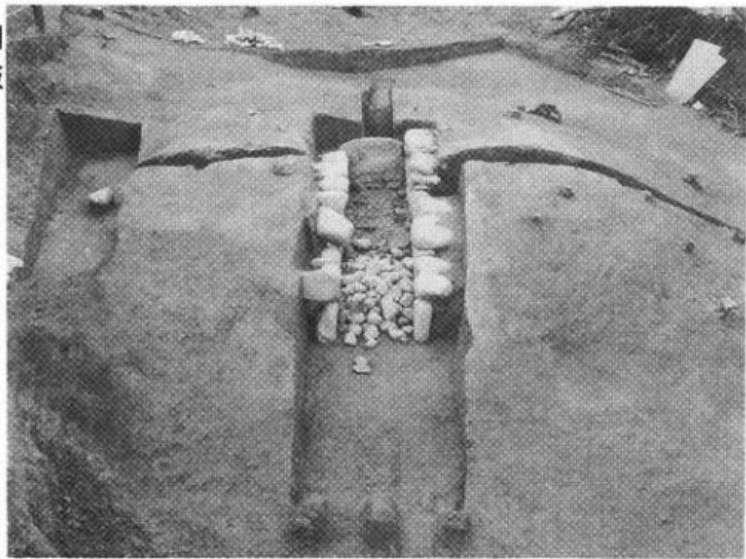
第25号墳 床面敷石状況（奥から）



第25号墳 床面敷石状況(入口から)



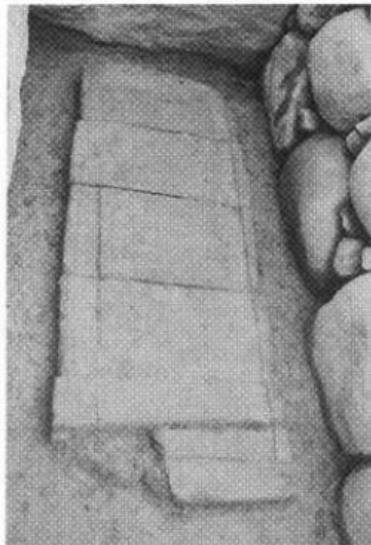
第26号・第25号墳 調査前の状況



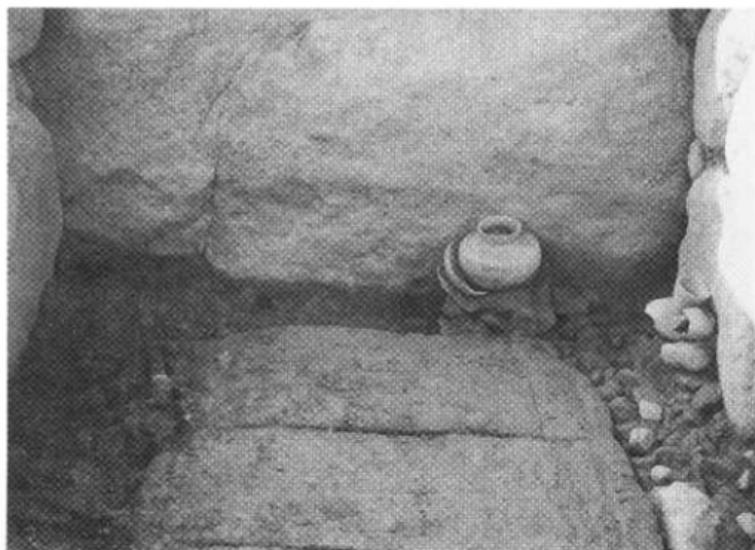
第26号墳 石室（南から）



第26号墳 玄室内石棺（南から）



第26号墳 玄室内石棺（東から）



第26号墳 奥壁側遺物出土状況



第26号墳 鉄刀出土状況



第26号墳 閉塞石（入口から）



第31号墳 石列状況（南から）



第31号墳 石列状況



第32号墳 石室発見状況



第32号墳 石室（南から）



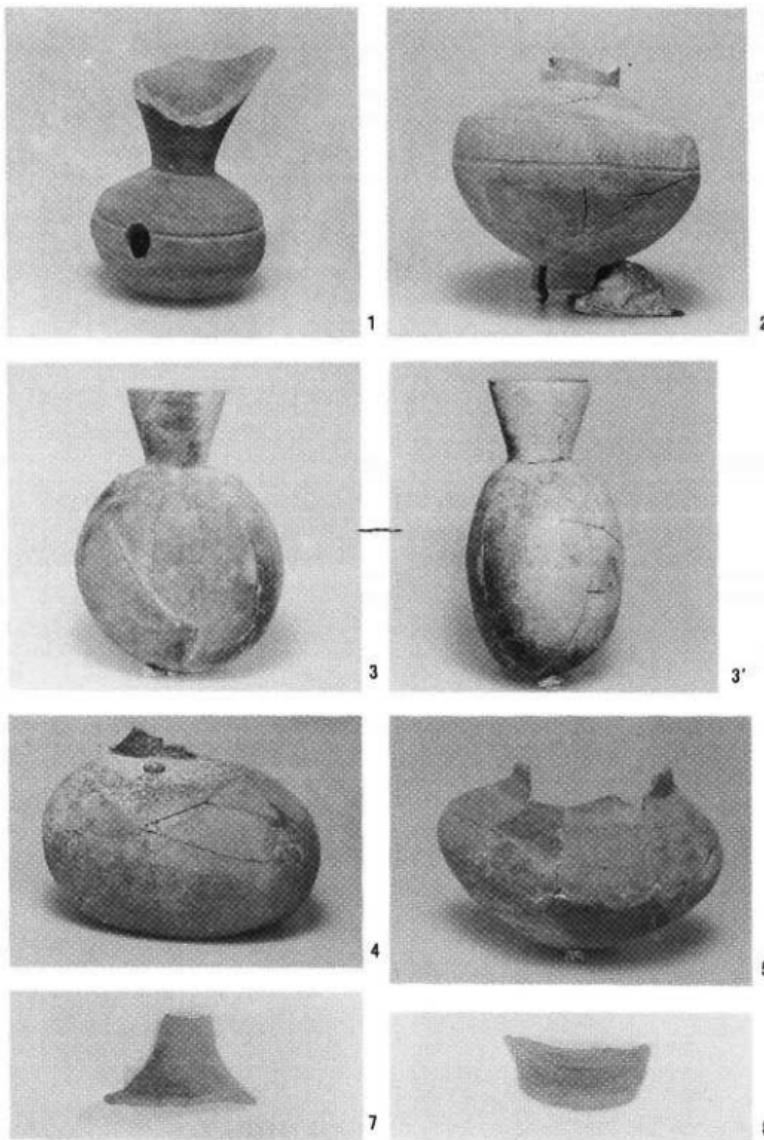
第33号墳 石室（南から）



第33号墳 玄室敷石と遺物出土状況



第33号墳 金環出土状況

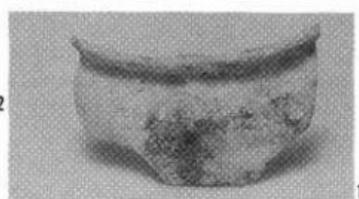


第17号墳(1.2)・第25号墳(3~8) 出土遺物

図版 I  
10



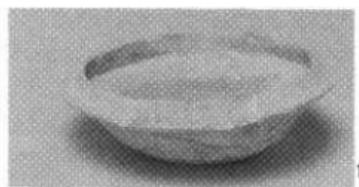
10



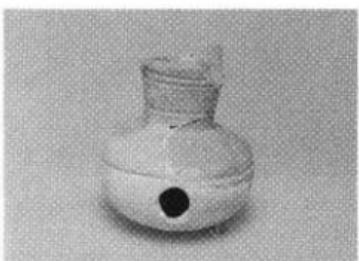
11



12



13



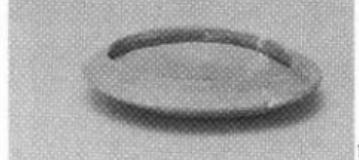
14



15



16



17

第25号墳(10~15)・第26号墳(16~21) 出土遺物



34



33  
1



11



17



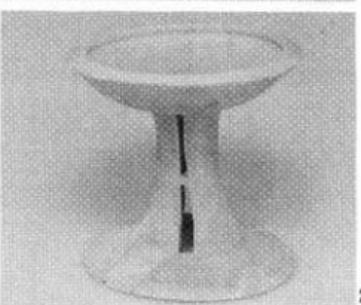
19



25



20



24

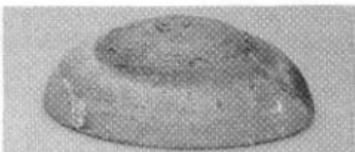


22

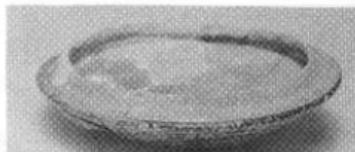


23

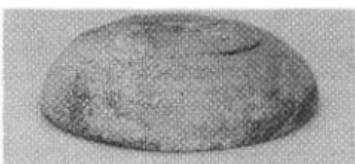
第26号墳 出土遺物



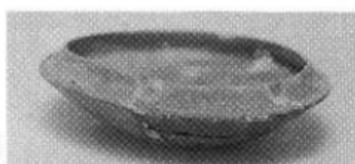
27



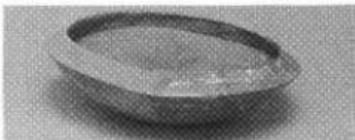
29



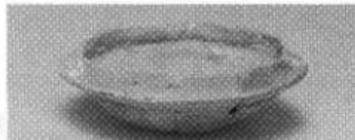
30



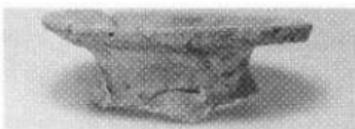
28



26



31



35



50



36

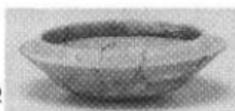


49

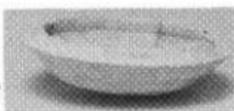
第26号墳(26~31)・第31号墳(35~36)・第33号墳(49~51) 出土遺物



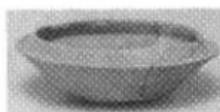
42



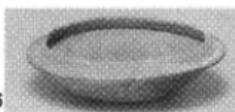
47



43

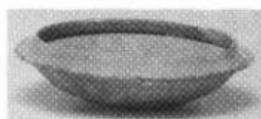


46



48

45



44



40



38



41



52



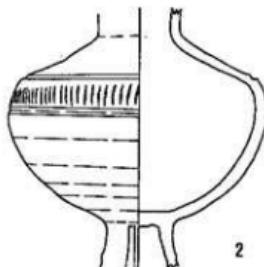
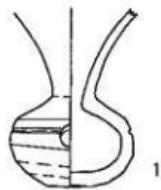
39



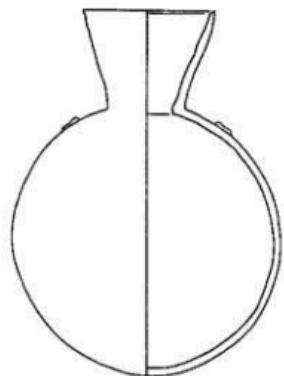
54-55

第26号墳(54・55)・第33号墳 出土遺物

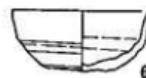
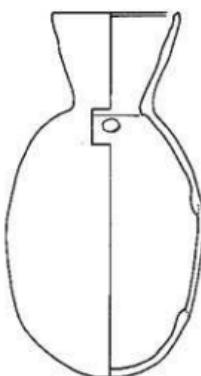
図版  
14



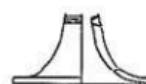
0 10m



-



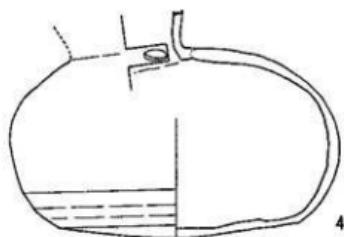
6



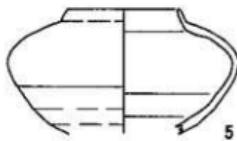
8



9

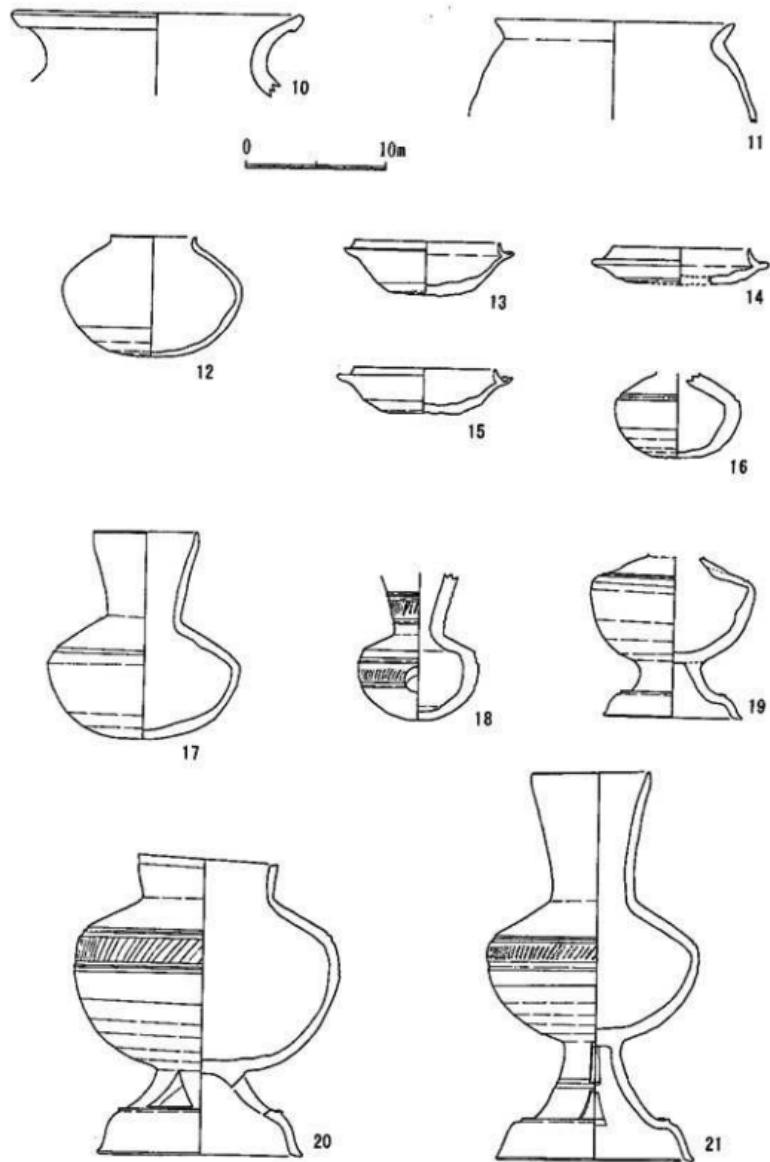


4



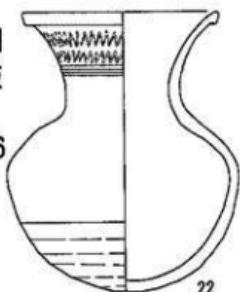
5

第17号墳(1・2)・第25号墳(3~9) 出土遺物



第25号墳(10~15)・第26号墳(16~21) 出土遺物

図版  
— 16 —



22



23



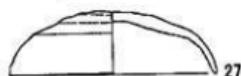
24



25



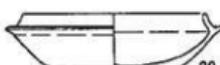
26



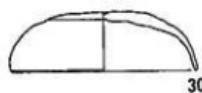
27



28



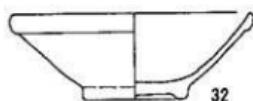
29



30



31



32



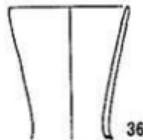
33



34

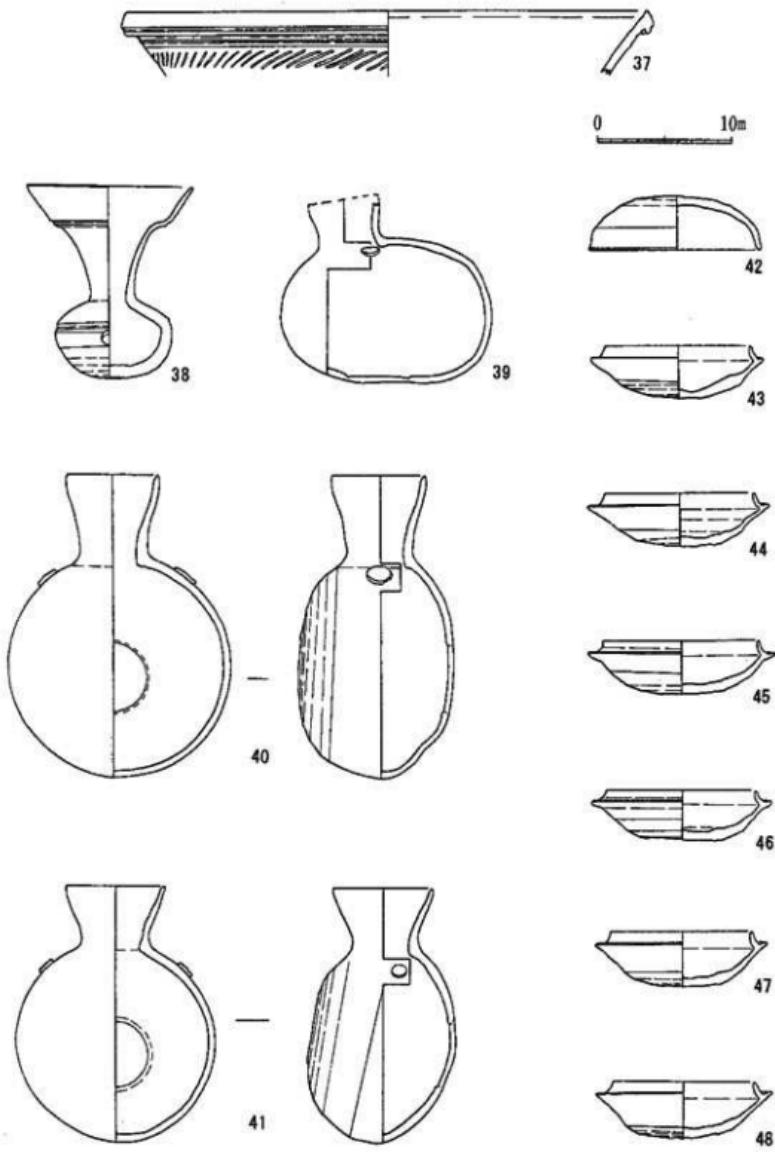


35



36

第26号墳(22~34)・第31号墳(35, 36) 出土遺物



第33号墳 出土遺物

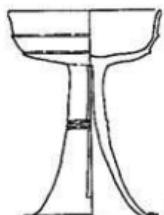
図版  
— 18 —



49

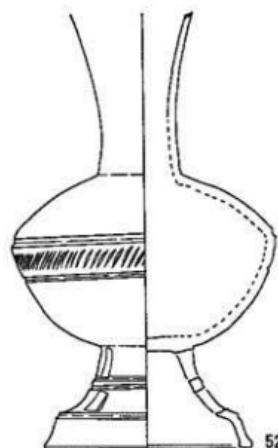


50



51

0 10m



52



53



54



55

0 10m



56



57



58



59

第33号墳(49~57)・第25号墳(58·59) 出土遺物



## 平成5年度発掘調査概報

発行日 平成6年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 (株)コトブキ印刷